

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：14503

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05763・19K20955

研究課題名(和文)現代アメリカにおける体育カリキュラム論の研究

研究課題名(英文)A Study of Physical Education Curriculum Theory in America

研究代表者

徳島 祐彌 (TOKUSHIMA, Yuya)

兵庫教育大学・その他部局等・助教

研究者番号：00819443

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、技能の習得や運動の楽しさの保障を目指す体育カリキュラムの構築を目的として、主に1960年代以降のアメリカにおける体育カリキュラム論の展開を検討した。本研究の主要な成果は、(1)アメリカにおける体育理論のいくつかの系譜(ムーブメント教育、アドベンチャー教育、スポーツ教育)におけるカリキュラム設計の方法を整理したことと、(2)アメリカの議論を踏まえつつ「逆向き設計」に基づく体育カリキュラムを構想したことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、ムーブメント教育、アドベンチャー教育、スポーツ教育などアメリカにおける体育カリキュラムのいくつかの系譜について、思想的背景とカリキュラム設計を整理した点にある。また、本研究の社会的意義は、日本の学習指導要領等を検討したうえで、「逆向き設計」の考え方をういた体育カリキュラムを構想した点にある。このように、アメリカにおける体育カリキュラム論を整理し、その上で日本の体育カリキュラムの在り方を構想した点が本研究の成果である。

研究成果の概要(英文)：In this research, the physical education curriculum that aims to acquire both skills and enjoyment was studied. Predominantly the development of physical education curriculum theory in the United States since the 1960s was studied. The main results of this research are: (1) examination of curriculum design methods in various genealogy of physical education in the United States (movement education, adventure education, and sport education), (2) proposal of a physical education curriculum based on "backward design" focusing on research on the United States.

研究分野：体育

キーワード：体育 カリキュラム アメリカ

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本における体育カリキュラムの議論では、学習指導要領 (Cf. 文部科学省編『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 体育編』東洋館出版社、2018年)に見られる器械運動(鉄棒など)やボール運動(サッカーなど)というように、スポーツの種目による内容編成が中心となってきた。学習指導要領の改訂においては、運動領域のカテゴリーや、取り上げられるスポーツ種目が注目される傾向にある。しかし、このスポーツの割合の高い内容編成には、スポーツの教育となる実践が多くなったり、スポーツの持つゲーム性や競技性が中心となりスポーツではカバーできない身体活動が主流から外れたりするという問題点がある (Cf. 井谷恵子『体力づくりからフィットネス教育へ: アメリカの体育教育と身体づくりへの責任』明石書店、2005年、p. 209)。この現状に対して、体育の内容設定の基準となるカリキュラム理論の研究が不十分である点が課題と考えられている (井谷、2005、p. 209)。スポーツ種目による内容編成を超えて目的を実現するための体育カリキュラム研究が必要と考えられる。

以上の課題に対して、本研究ではアメリカにおける体育カリキュラム論の展開に着目する。アメリカでは、主に1960年代以降に、それまでの体育理論を踏まえつつ、ムーブメント教育、フィットネス教育、アドベンチャー教育、スポーツ教育など多様な体育カリキュラムが提案されてきた。その中で、運動の技能や概念の習得を重視する立場や、社会性や情意面の発達を重視する立場など、多様なカリキュラム設計のアプローチが採られてきた。また、1990年代から2000年代以降になると、「スタンダードに基づく体育」など、体育のスタンダードを用いつつ、多様なカリキュラムをモデルとして取り入れてカリキュラムを設計する方法も示されてきた。これらアメリカにおける体育カリキュラム論の展開は、スポーツ種目とは異なる体育カリキュラムの在り方を考えるにあたって重要な検討対象となると考えられる。

アメリカの体育に関する研究としては、フィットネス教育についての研究 (井谷、2005)、体育のナショナル・スタンダードおよびヘリソン (Hellison, D.) の体育理論に関する研究 (友添秀則『体育の人間形成論』大修館書店、2009年)、シーデントップ (Siedentop, D.) の体育理論に関する研究 (和田博史・近藤智靖「シーデントップの体育思想におけるスポーツ教育モデルに関する研究: その研究成果と我が国の体育授業改善」『体育・スポーツ哲学研究』37(2)、2015年、pp. 99-114) などが蓄積されてきた。また、研究代表者は「スタンダードに基づく体育」などを検討してきた。

しかし、これらの先行研究では、アメリカにおける体育の一つの立場を対象として、その立場の理論の解明を中心としており、それぞれの立場の相互関係を捉えるという点では課題があると考えられる。また、それぞれの体育の立場について、カリキュラム設計という視点からの検討という点でも課題がある。体育カリキュラムの在り方を考えるためには、多様な体育の立場の対立点や、それぞれのカリキュラム設計の意義と課題を検討することが重要であると思われる。また、これらアメリカにおける体育カリキュラム論の検討を踏まえた上で、日本における体育カリキュラム論のあり方を考察することが必要であると思われる。

### 2. 研究の目的

本研究は、アメリカにおける体育カリキュラム論の検討を通して、技能の習得や概念理解、楽しさを保障する体育カリキュラムのあり方について考察することを目的とする。1960年代以降のアメリカに着目し、技能や概念を重視する系譜と、社会性や情意面を重視する系譜の対立点に即して検討する。本研究では、これまでに思想的背景とカリキュラム設計の方法の検討が十分にされていないムーブメント教育、アドベンチャー教育、スポーツ教育を主な対象とし、それぞれの立場の特徴を明らかにする。また、アメリカにおける体育カリキュラムの論点と、日本の学習指導要領や体育実践を踏まえながら、新たな体育カリキュラムを構想する。

### 3. 研究の方法

本研究は、(1)アメリカの体育に関する文献調査、(2)アメリカでのフィールドワーク、(3)日本の体育カリキュラムおよび体育実践の検討を通して行う。アメリカの体育に関する文献調査としては、ムーブメント教育、アドベンチャー教育、スポーツ教育を中心に文献を集めて、情報の整理と理論的な検討を行った。また、アメリカでのフィールドワークにおいて、大学教員へのインタビューや学校見学を行った。そして、これらの研究を踏まえつつ、学習指導要領等を分析し、アメリカの体育カリキュラム論においても参照されている「逆向き設計」の方法を用いて体育カリキュラムを構想した。

### 4. 研究成果

本研究の成果は、(1)ムーブメント教育、アドベンチャー教育、スポーツ教育を中心としたアメリカにおける体育カリキュラム論の検討、および体育カリキュラムを総括的に検討する視点の整理、(2)「逆向き設計」に基づく体育カリキュラムの構想の2点にまとめることができる。

#### (1)アメリカにおける体育カリキュラム論の検討

以下では、ムーブメント教育、アドベンチャー教育、そしてシーデントップのスポーツ教育のカリキュラムについて検討した成果を要約し、その上で体育カリキュラム論を総括的に検討するための視点を確認する。

ムーブメント教育のカリキュラムについて、グレアム (Graham, G.) らによる「スキル・テーマ」カリキュラムを中心に検討した。その成果として、「スキル・テーマ」カリキュラムに次の特徴を見出した。すなわち、①子どもに必要なスキルと概念を選ぶためのホイールを用い、指導内容に偏りがないように内容を編成していること、②子どもたちが自分のスキルを把握し、概念との組み合わせ方を探究できるようにしていること、③脱文脈化されたスキルと概念からゲーム・体操・ダンスを考えるという活用の仕方を想定していること、④一つのスキルを短期間で扱う年間指導計画を提示していることである。「スキル・テーマ」カリキュラムの検討を通して、技能や概念の習得を中心とするムーブメント教育において、運動の理解と創造の両面が重視されていることを考察した。

アドベンチャー教育のカリキュラムについて、ダイソン (Dyson, B.) らおよびワグスタッフ (Wagstaff, M.) らのカリキュラムを中心に検討した。その成果として、アドベンチャー教育カリキュラムに関して次の特徴を指摘できる。すなわち、①情意面を重視しながらも、特定の活動に特化した概念と技能に即して内省を促すような構想がなされていること (ダイソンら)、②技能の課題を中心とした単元を設計しつつ、価値の認識やコミュニケーションといった情意面の学習が意図されていること (ワグスタッフら) である。信頼や意思決定といった社会性や情意面に関わる目標を重視しつつも、技能や概念を踏まえた計画をするという発想は重要であると考えられる。

シーデントップのスポーツ教育について、特に思想的背景と体育カリキュラム論の関連性に着目して検討した。具体的には、実存主義および行動主義からの影響を踏まえつつ、ヒューマニスティック体育論と比較しながら、シーデントップの思想の特徴について考察した。その成果として、特に 1970 年代頃のシーデントップの体育思想について次の特徴を見出した。すなわち、①自己を学習されるものと捉え、教師があらかじめ想定する自己実現の方法を批判したこと、②パフォーマンスについての他者からの影響を重視すること、③運動遊びにおける他者とのコミュニケーションを重視することである。加えて、他者からの影響を重視するシーデントップが、祭典性のある活動をチームで行うスポーツ教育のカリキュラム開発へと至った展開について考察した。このように見ると、シーデントップには技能を他者とのコミュニケーションとの関係で捉える傾向があったと考えられる。

以上の検討を通して、それぞれの立場において、技能や楽しさ、内容編成の捉え方が異なることを明らかにした。これらの検討と、これまでに蓄積してきた「スタンダードに基づく体育」の研究などを踏まえて、アメリカにおける体育カリキュラム論を検討するための視点について考察した。そして、思想的背景における対立点、内容編成における技能と概念の位置づけ、単元の捉え方、カリキュラムと授業の関係という論点で整理する重要性を確認した。特に、それぞれの立場のカリキュラム設計において、概念や技能などの編成や捉え方が異なっており、スタンダードを用いて体育の成果を考える際にはこれらの違いを考慮する必要があるだろう。

## (2) 「逆向き設計」に基づく体育カリキュラムの構想

日本の学習指導要領および体育実践を検討し、その上で「逆向き設計」に基づく体育カリキュラムを構想した。「逆向き設計」とは、ウィギンズ (Wiggins, G.) らが提唱しているカリキュラム設計の方法であり、教育目標、評価方法、学習経験と指導を一体としてカリキュラム設計を行うものである (西岡加名恵編著『教科と総合学習のカリキュラム設計：パフォーマンス評価をどう活かすか』図書文化社、2016 年、p. 21)。この「逆向き設計」では、教育目標を設定する際に「本質的な問い」と「永続的理解」を考えたり、評価方法においてパフォーマンス課題に基づく評価を取り入れたりしてカリキュラムを設計する。この「逆向き設計」の考え方を活用して、どのように体育カリキュラムを構想できるのかについて検討した。

「逆向き設計」を踏まえた体育カリキュラムは、これまでも提案されている。本研究では、先行研究に学びつつ、2017 年版学習指導要領を踏まえて「逆向き設計」による体育カリキュラムを再構成した。本研究を通して、「運動をすることの意味とは何か？」と「運動技能を獲得するためにはどうすればよいのか？」という「本質的な問い」を軸とし、それぞれの内容におけるパフォーマンス課題を設定したカリキュラムを構想した。また、「逆向き設計」の考え方を取り入れている日本の体育の授業実践 (単元「バスケットボール」) を検討し、「本質的な問い」や「永続的理解」を設定する重要性を指摘した。これらの研究を通して、体育科の技能や概念、楽しさを育て、「深い学び」を実現するために「逆向き設計」に基づくカリキュラム設計の考え方が重要であることを確認した。

## (3) 本研究のまとめと課題

本研究を通して、ムーブメント教育、アドベンチャー教育、スポーツ教育の思想的背景とカリキュラム設計を整理した。これらの検討を通して、「スタンダードに基づく体育」など複数のカリキュラム・モデルを用いるカリキュラム設計論が、多様な系譜の体育カリキュラム論を踏まえて再構成される必要があることを見出した。しかしながら、「スタンダードに基づく体育」の再構成を進めているものの、具体的なモデルを提案するまでには至っておらず、スタンダードとカリキュラム・モデルの関係について研究することが今後の課題である。また、アメリカの議論を踏まえつつ「逆向き設計」に基づく体育カリキュラムを構想したが、今回構想した体育カリキュラムを実践的に研究することが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 徳島祐彌	4. 巻 第22号
2. 論文標題 スポーツ教育論の単元設計に関する一考察：グループ学習を促す課題づくりに焦点を合わせて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育方法の探究	6. 最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/241662	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 徳島祐彌	4. 巻 第65号
2. 論文標題 アメリカにおけるアドベンチャー教育論に関する一考察：単元設計と授業計画における教科内容の位置づけに着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都大学大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 373-385
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 徳島祐彌	4. 巻 41(1)
2. 論文標題 シーデントップの体育思想に関する一考察：ヒューマニスティック体育論との比較を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 体育・スポーツ哲学研究	6. 最初と最後の頁 17-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.9772/jpspe.41.1_17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 徳島祐彌	4. 巻 39(2)
2. 論文標題 Graham et al. による「スキル・テーマ」カリキュラムの検討：小学校の「体づくり運動」のカリキュラム設計を考えるために	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 スポーツ教育学研究	6. 最初と最後の頁 27-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7219/jjses.39.2_27	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 徳島祐彌
2. 発表標題 アメリカにおけるゲーム指導のカリキュラムに関する一考察 戦術アプローチを中心に
3. 学会等名 大阪体育学会 第58回大会（大会中止、発表有効）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 西岡加名恵, 石井英真編著（徳島祐彌 分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本標準	5. 総ページ数 152
3. 書名 教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価：「見方・考え方」をどう育てるか（「第11章 体育・保健体育科」担当）	

1. 著者名 石井英真, 西岡加名恵, 田中耕治編著（徳島祐彌 分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本標準	5. 総ページ数 244
3. 書名 小学校 新指導要録改訂のポイント 新3観点による資質・能力の評価がわかる！（「9 体育」「知識・技能」と「思考・判断・表現」を共に育てるルーブリックの活用へ」担当）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考